

## 地球科学の社会貢献－地震学を例として

## Earth Science's contribution to society - taking Seismology as an example

# 長谷川 昭 [1]

# Akira Hasegawa[1]

[1] 東北大・理・予知セ

[1] RCPEV, Graduate School of Sci., Tohoku Univ.

犠牲者2名を含む被害を生じた1880年4月の横浜地震を契機として日本地震学会が創設された。当時日本に滞在中の外国人学者が中心となってつくった世界で最初の地震学会であった。その後、地震学会は1892年に一旦解散し、地震に関する調査研究の活動は同年4月に発足した震災予防調査会などに引き継がれた。1923年9月1日に発生した関東地震による未曾有の大震災を経験して、地震学会が1929年1月に再び設立された。戦争により1943年から1947年の間は活動が休止されていたが、1948年に再開され現在に至っている。このように地震学はその始まりから、大地震による悲惨な災害を軽減・防止することを目指して推進されてきたという歴史を持つ。その意味で地震学は社会とのつながりが極めて深く、地震学の発展には社会の要請も大きな原動力の一つとなってきた。そして、地震学は地震災害の軽減・防止に少なからず貢献してきた。一方で、社会とのつながりがあまりにも密接であるために、学問の進展の度合に応じて適切に社会と関わり社会に貢献することの難しさが常につきまとう。日本地震学会でも、1995年兵庫県南部沖地震による阪神・淡路大震災を契機として、学会のあり方について検討し社会貢献を活動目的とする3つの委員会を立ち上げるなど、上記の課題についてどのように対応してゆくべきかの検討を進めている。また、測地学審議会（現科学技術・学術審議会測地学分科会）の建議に基き推進されてきた「地震予知計画」も、阪神・淡路大震災を契機として見直しが行われ、研究者に開かれた形で計画を推進する、現在の「地震予知のための新たな観測研究計画」へと改められた。このような取り組みを絶えず意識して行うことが、上記の困難を克服し社会貢献を効果的ならしめる上で重要であろう。